

風野又三郎

宮沢賢治

青空文庫

九月一日

どっどどどどうど　どどうど　どどう、

ああまいざくろも吹きとばせ

すっぱいざくろもふきとばせ

どっどどどどうど　どどうど　どどう

谷川の岸に小さな四角な学校がありました。

学校といつても入口とあとはガラス窓の三つついた教室がひとつあるきりでほかには溜りも教員室もなく運動場はテニスコート

たま

のくらいでした。

先生はたった一人で、五つの級を教えるのでした。それはみんなでちようど二十人になるのです。三年生はひとりもありません。

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪ゆきばかま袴はかまをはいた二人の一年生の子がどてをまわつて運動場にはいつて来て、まだほかに誰たれも来ていないのを見て

「ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。」とかわるがわる叫さけびながら
大悦おおよろこびで門をはいつて来たのでしたが、ちよつと教室の中を

見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合せてぶるぶるふるえました。がひとりはどうとう泣き出

してしまいました。というわけはそのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔も知らないおかしな赤い髪かみの子供がひとり一番前の机にちゃんと座すわっていたのです。そしてその机といったらまったくこの泣いた子の自分の机だったのです。もひとりの子ももう半分泣きかけていましたが、それでもむりやり眼めをりんと張つてそつちの方をにらめていましたら、ちょうどそのとき川上から

「ちやうはあぶどり、ちやうはあぶどり」と高く叫ぶ声がしてそれからいなくまのように嘉助かすけが、かばんをかかえてわらつて運動場へかけて来ました。と思つたらすぐそのあとから佐太郎だの耕助だのどやどややってきました。

「なして泣いでら、うなかもたのが。」嘉助が泣かないこどもの肩をつかまえて云いました。するとその子もわあと泣いてしまいました。おかしいとおもってみんながあたりを見ると、教室の中にあの赤毛のおかしな子がすましてしゃんとすわっているのが目につきました。みんなはしんとなつてしまいました。だんだんみんな女の子たちも集つて来ましたが誰も何とも云えませんでした。赤毛の子どもは一向こわがる風もなくやつぱりじつと座つています。すると六年生の一郎が来ました。一郎はまるで坑夫こうふのようにゆつくり大股おおまたにやつてきて、みんなを見て「何なした」とききました。みんなははじめてがやがや声をたててその教室の中の変な子を指しました。一郎はしばらくそつちを見ていましたがやがて

鞆かばんをしつかりかかえてきつさと窓の下へ行きました。みんなもすつかり元気になつてついて行きました。

「誰たれだ、時間にならないに教室へはいつてるのは。」一郎は窓へはいのぼつて教室の中へ顔をつき出して云いました。

「先生にうんと叱しからえるぞ。」窓の下の耕助が云いました。

「叱らえでもおら知らないよ。」嘉助が云いました。

「早く出はつて来、出はつて来。」一郎が云いました。けれどもそのこどもはきよろきよろ室へやの中やみんなの方を見るばかりでやつぱりちやんとひぎに手をおいて腰掛こしかけに座つていました。

ぜんたいその形からが実におかしいのでした。変てこな鼠ねずみいろのマントを着て水晶すいしょうかガラスか、とにかくきれいなすきとお

つた沓くつをはいていました。それに顔と云ったら、まるで熟した萃り果んごのような殊ことに眼はまん円でまつくろなものでした。一向語ことばが通じないようなので一郎も全く困つてしまいました。

「外国人だな。」「学校さ入るのだな。」みんなはがやがやがやがや云いました。ところが五年生の嘉助がいきなり

「ああ、三年生さ入るのだ。」と叫びましたので

「ああ、そうだ。」と小さいこどもらは思いましたが一郎はだまつてくびをまげました。

変なこどもはやはりきよろきよろこつちを見るだけきちんと腰掛けています。ところがおかしいことは、先生がいつものキラキラ光る呼子笛ふえを持っていきなり出入口から出て来られたのです。

そしてわらって

「みなさんお早う。どなたも元気ですね。」と云いながら笛を口にあててピルルと吹きま^ふした。そこでみんなはきちんと運動場に整列しました。

「気を付けっ」

みんな気を付けをしました。けれども誰の眼もみんな教室の中の変な子に向いていました。先生も何があるのかと思っただらしく、ちよつとうしろを振り向いて見ましたが、なあになんでもないと
いう風でまたこつちを向いて

「右いおいっ」と号令をかけました。ところがおかしな子どもはやっぱりちやんとこしかけたままきろきろこつちを見ています。

みんなはそれから番号をかけて右向けをして順に入口からはいり
ましたが、その間中も変な子供は少し額しわに皺しわを寄せて「以下原稿
数枚なし」

と一郎が一番うしろからあまりさわぐものを一人ずつ叱りました。

みんなはしんとなりました。

「みなさん休みは面おもしろ白おもしろかったね。朝から水泳ぎもできたし林の

中で鷹たかにも負けないくらい高く叫んだりまた兄さんの草刈くさかりにつ

いて行ったりした。それはほんとうにいいことです。けれどもも

う休みは終わりました。これからは秋です。むかしから秋は一番勉

強のできる時だといってあるのです。ですから、みなさんも今日

から又またしっかり勉強しましょう。みなさんは休み中でいちばん面白かったことは何ですか。」

「先生。」と四年生の悦治が手をあげました。

「はい。」

「先生さっきたの人あ何だったべす。」

先生はしばらくおかしな顔をして

「さっきの人……」

「さっきたの髪の赤いわらすだんす。」みんなもどつと叫びました。

「先生髪のまつ赤なおかしなやづだったんす。」

「マント着てたで。」

「笛鳴らないに教室さはいってたぞ。」

先生は困つて

「一人ずつ云うのです。髪の赤い人がここに居たのですか。」

「そうです、先生。」〔以下原稿数枚なし〕

の山にのぼつてよくそこらを見ておいでなさい。それからあしたは道具をもつてくるのです。それではここまで。」と先生は云いました。みんなもうあの山の上ばかり見ていたのです。

「氣を付けつ。」一郎が叫びました。「礼つ。」みんなおじぎをするや否いなやまるで風のように教室を出ました。それからがやがやその草山へ走つたのです。女の子たちもこつそりついて行きました

た。けれどもみんなは山にのぼるとがっかりしてしまいました。みんながやつとその栗くりの木の下まで行ったときはその変な子はどう見えませんでした。そこには十本ばかりのたけにぐさが先生の云ったとおり風にひるがえっているだけだったのです。けれども小さい方のこどもらはもうあんまりその変な子のことばかり考えていたもんですからもうそろそろ厭あきていました。

そしてみんなはわかれてうちへ帰りましたが一郎や嘉助は仲々それを忘れてしまうことはできませんでした。

九月二日

次の日もよく晴れて谷川の波はちらちらひかりました。

一郎と五年生の耕一とは、丁度午後二時に授業がすみましたので、いつものように教室の掃除をして、それから二人一いっしょ緒に学校の門を出しましたが、その時二人の頭の中は、昨日の変な子供でいっばい一杯になっていました。そこで二人はもう一度、あの青山の栗の木まで行って見ようと相談しました。二人は鞆をきちんと背負い、川を渡つて丘をぐんぐん登って行きました。

ところがどうです。丘の途とちゆう中の小さな段を一つ越えて、ひよつと上の栗の木を見ますと、たしかにあの赤髪の鼠色のマントを着た変な子が草に足を投げ出して、だまって空を見上げているのです。今日こそ全く間違まちがいありません。たけにぐさは栗の木の左

の方でかすかにゆれ、栗の木のかげは黒く草の上に落ちています。

その黒い影は変な子のマントの上にもかかっているのです。

二人はそこで胸をどきどきさせて、まるで風のようにかけ上りました。その子は大きな目をして、じつと二人を見ていましたが、逃げようとしなければ笑いもしませんでした。小さな唇を強そうにきつと結んだまま、黙つて二人のかけ上つて来るのを見えました。

二人はやつとその子の前まで来ました。けれどもあんまり息がはあはあしてすぐには何も云えませんでした。耕一などはあんまりもどかしいもんですから空へ向いて、

「ホツホウ。」と叫んで早く息を吐いてしまおうとしました。す

るとその子が口を曲げて一寸ちよつと笑いしました。

一郎がまだはあはあ云いながら、切れ切れに叫びました。

「うな汝たれあ誰だ。何だうな汝あ。」

するとその子は落ちついて、まるで大人のようにしつかり答えました。

「風野又三郎。」

「どこの人だ、ロシヤ人か。」

するとその子は空を向いて、はあはあはあ笑い出しました。その声はまるで鹿しかの笛のようでした。それからやっとまじめになつて、

「又三郎だい。」とぶつきら棒に返事しました。

「ああ風の又三郎だ。」一郎と耕一とは思わず叫んで顔を見合せました。

「だからそう云ったじゃないか。」又三郎は少し怒ったようにマントからとがった小さな手を出して、草を一本むしってぷいっと投げつけながら云いました。

「そんだったらあつちこつち飛んで歩くな。」一郎がたずねました。

「うん。」

「面白いか。」と耕一が言いました。すると風の又三郎は又笑い出して空を見ました。

「うん面白い。」

「昨日何して逃げた。」

「逃げたんじやないや。昨日は二百十日だい。本当なら兄さんたちと一緒にずうつと北の方へ行つてるんだ。」

「何^なして行かなかつた。」

「兄さんが呼びに来なかつたからさ。」

「何て云う、汝^{うな}の兄^{あい}なは。」

「風野又三郎。きまつてるじやないか。」又三郎は又機嫌^{きげん}を悪くしました。

「あ、判^{わか}つた。うなの兄^{あい}なも風野又三郎、うないのお父^{おじ}さんも風野又三郎、うないの叔父^{おじ}さんも風野又三郎だな。」と耕一が言い
ました。

「そうそう。そうだよ。僕^{ぼく}はどこへでも行くんだよ。」

「支那へも行ったか。」

「うん。」

「岩手山へも行ったが。」

「岩手山から今来たんじゃないか。ゆうべは岩手山の谷へ泊つたんだよ。」

「いいなあ、おらも風になるたいなあ。」

すると風の又三郎はよろこんだの何のつて、顔をまるでりんごのようにかがやくばかり赤くしながら、いきなり立つてきりきりきりつと二三べんかかどで廻りました。鼠色のマントがまるでギラギラする白光りに見えました。それから又三郎は座つて話し出しました。

「面白かったぞ。今朝のはなし聞かせようか、そら、僕は昨日の朝ここに居たろう。」

「あれから岩手山へ行つたな。」耕一がたずねました。

「あつたりまえさ、あつたりまえ。」又三郎は口を曲げて耕一を馬鹿ばかにしたような顔をしました。

「そう僕のはなしへ口を入れないで黙つておいで。ね、そら、昨日の朝、僕はここから北の方へ行つたんだ。途中で六十五回もいねむりをしたんだ。」

「何なしてそんなにひるねした？」

「仕方ないさ。僕たちが起きてはね廻つていようたつて、行くところがなくなればあるけないじゃないか。あるけなくなりや、い

ねむりだい。きまつてらあ。」

「歩けないたつて立つが座ねまるかして目をさましていればいい。」

「うるさいねえ、いねむりたつて僕がねむるんじゃないんだよ。」

お前たちがそう云うんじゃないか。お前たちは僕らのじつと立ったり座ったりしているのを、風がねむると云うんじゃないか。僕
はわざとお前たちにわかるように云つてるんだよ。うるさいねえ。
もう僕、行つちまうぞ。黙つて聞くんだけ。ね、そら、僕は途中で
六十五回いねむりをして、その間考えたり笑つたりして、夜中の
一時に岩手山の丁度三合目についたろう。あすこの小屋にはもう
人が居ないねえ。僕は小屋のまわりを一ぺんぐるつとまわつたん
だよ。そしてまっくろな地面をじつと見おろしていたら何だか足

もとがふらふらするんだ。見ると谷の底がだいぶ空あいてるんだ。僕らは、もう、少しでも、空いているところを見たらすぐ走って行かないといけないんだからね、僕はどんどん下りて行ったんだ。谷底はいいねえ。僕は三本の白樺しらかばの木のかげへはいつてじつとじつかにしていたんだ。朝までお星さまを数えたりいろいろこれからの面白いことを考えたりしていたんだ。あすこの谷底はいいねえ。そんなにじつじつかじやないんだけれど。それは僕の前にまっ黒な崖がけがあつてねえ、そこから一晩中ころかさかさ石かけや火山灰のかたまつたのやが崩くずれて落ちて来るんだ。けれどもじつとその音を聞いているとね、なかなか面白いんだよ。そして今朝少し明るくなるとその崖がまるで火が燃えているようにまっ赤なん

だろう。そうそう、まだ明るくならないうちにね、谷の上の方を
 まっ赤な火がちらちらちらちら通つて行くんだ。櫓ならの木や樺の木
 が火にすかし出されてまるで 烏からすうり 瓜とうろうの燈籠のように見えたぜ
 。

「そうだ。おら去年烏瓜あかしこきの燈火拵こぎえた。そして縁えんがわ側つるへ吊して置
 いたら風吹いて落ちた。」と耕一が言いました。

すると又三郎は噴ふき出してしまいました。

「僕お前の烏瓜の燈籠を見たよ。あいつは奇麗きれいだったねい、だか
 ら僕がいきなり衝つき当つて落してやったんだ。」

「うわあゐ。」

耕一はただ一言云つてそれから何ともいえない変な顔をしまし

た。

又三郎はおかしくておかしくてまるで咽喉のどを波のようにして一生けん命空の方に向いて笑っていましたがやつとこらえてなみだ涙を拭ふきながら申しました。

「僕失敬したよ。僕そのかわり今度いいものを持って来てあげるよ。お前んとこへね、きれいなほこやなぎの木を五本持つて行ってあげるよ。いいだろう。」

耕一はやつと怒るのをやめました。そこで又三郎は又お話をつづけました。

「ね、その谷の上を行く人たちはね、みんな白いきものを着て一番はじめの人はたいまつを待っていただろう。僕すぐもう行って

見たくて行つて見たくて仕方なかつたんだ。けれどどうしてもまだ歩けないんだろう、そしたらね、そのうちに東が少し白くなつて鳥がなき出したろう。ね、あすこにはやぶうぐいすや いわつばめ 岩 燕 やいろいろ居るんだ。鳥がチツクチツクなき出したろう。もう僕は早く谷から飛び出たくて飛び出たくて仕方なかつたんだよ。すると丁度いいことにはね、いつの間にか上の方が大へん空あいてるんだ。さあ僕はひらつと飛びあがつた。そしてピウ、ただ一足でさつきの白いきものの人たちのとこまで行つた。その人たちはね一列になつてつつじやなんかの生えた石からをのぼつているだろう。そのたいまつはもうみじかくなつて消えそうなんだ。僕がマントをフウとやって通つたら火がぼつぽつと青くうごいて

ね、とうとう消えてしまったよ。ほんとうはもう消えてもよかつたんだ。東が琥珀こはくのようになって大きなかげの形の雲が沢山たくさん浮かうか浮うかんでいた。

『あ、とうとう消けだ。』と誰たれかが叫んでいた。おかしいのはねえ、列のまん中ごろに一人の少し年老としとった人が居たんだ。その人がね、年を老たいぎつて大儀たいぎなもんだから前をのぼって行く若い人のシャツのはじにね、一寸ちよつととりついたんだよ。するとその若い人が怒こつてね、

『引ひつ張はるなつたら、先刻さつきたがらいで処とこさ来るづどいつつも引ひつ張はらが。』と叫さけんだ。みんなどつと笑わつたね。僕も笑わつたねえ。そして又一あしでもう頂上ていじやうに来ていたんだ。それからあの昔むかしの火

口のあとにはいつて僕は二時間ねむった。ほんとうにねむったの
さ。するとね、ガヤガヤ云うだろう、見るとさっきの人たちがや
つと登つて来たんだ。みんなで火口のふちの三十三の石ぼとけに
ね、バラリバラリとお米を投げつけてね、もうみんな早く頂上へ
行こうと競争なんだ。向うの方ではまるで泣いたばかりのような
群ぐんじょう 青すぎの山脈や杉すぎごけの丘のようなきれいな山にまつ白な雲が
所々かかっているだろう。すぐ下にはお苗なわしろ代おかまや御釜火口湖がま
つ蒼さおに光つて白しら樺かばの林の中に見えるんだ。面白かつたねい。み
んなぐんぐんぐんぐん走っているんだ。すると頂上までの処とじよにも
一つ坂があるだろう。あすこをのぼるとき又さっきの年としよ老りがね、
前の若い人のシャツを引っぱったんだ。怒っていたねえ。それで

も頂上に着いてしまうとそのとし老りがガラスの瓶を出してちいさなちいさなコップについてそれをそのぶんぶん怒っている若い人に持つて行つて笑つて拝むまねをして出したんだよ。すると若い人もね、急に笑い出してしまつてコップを押し戻していたよ。そしておしまいとうとうのんだらうかねえ。僕はもう丁度こつちへ来ないといけなかつたもんだからホウと一つ叫んで岩手山の頂上からはなれてしまつたんだ。どうだ面白いだらう。」

「面白いな。ホウ。」と耕一が答えました。

「又三郎さん。お前はまだまだここに居るのか。」一郎がたずねました。

又三郎はじつと空を見ていました。

「そうだねえ。もう五六日は居るだろう。歩いたつてあんまり遠くへは行かないだろう。それでももう九日たつと二百二十日だからね。その日は、事によると僕はタスカロラ海^{かいしやう}床のすつかり北のはじまで行つちまうかも知れないぜ。今日もこれから一寸向うまで行くんだ。僕たちお友達になろうかねえ。」

「はじめから友だちだ。」一郎が少し顔を赤くしながら云いました。

「あした僕は又どつかであうよ。学校から帰る時もし僕がここに居たようならすぐおいで。ね。みんなも連れて来ていいんだよ。僕はいくらでもいいこと知つてんだよ。えらいだろう。あ、もう行くんだ。さよなら。」

又三郎は立ちあがってマントをひろげたと思うとフィウと音がしてもう形が見えませんでした。

一郎と耕一とは、あした又あうのを楽しみに、丘を下つておうちに帰りました。

九月三日

その次の日は九月三日でした。昼すぎになつてから一郎は大きな声で云いました。

「おう、又三郎は昨日又^{また}来たぞ。今日も来るかも知れないぞ。又三郎の話聞きたいものは一^{いっしょ}緒にあべ。」

残っていた十人の子供らがよろこんで、

「わあっ」と叫びました。

そしてもう早くもみんなが丘おかにかけ上ったのでした。ところが又三郎は来ていないのです。みんなは声をそろえて叫びました。

「又三郎、又三郎、どうぞと吹ふいで来こ。」

それでも、又三郎は一向来ませんでした。

「風どうと吹いて来こ、豆呉けら風どうと吹いで来こ。」

空には今日も青光りが一いっぱい杯みなに漲みなぎり、白いまばゆい雲が大きわな環わになって、しずかにめぐるばかりです。みんなは又叫びました。

「又三郎、又三郎、どうと吹いて降りで来こ。」

又三郎は来ないで、却かえつてみんな見上げた青空に、小さな小さなすき通った渦うずまき巻が、みずすましの様に、ツイツイと、上つたり下つたりするばかりです。みんなは又叫びました。

「又三郎、又三郎、汝うな、何なして早く来ない。」
それでも又三郎はやっぱり来ませんでした。

ただ一疋びきの鷹たかが銀色の羽をひるがえして、空の青光を咽喉一杯のに呑みながら、東の方へ飛んで行くばかりです。みんなは又叫びました。

「又三郎、又三郎、早く此こき飛んで来。」

その時です。あのすきとおる沓くつとマントがギラツと白く光つて、風の又三郎は顔をまっ赤ほてに熱らせて、はあはあしながらみんなの

前の草の中に立ちました。

「ほう、又三郎、待っていたぞ。」

みんなはてんでに叫びました。又三郎はマントのかくしから、うすい黄色のはんけちを出して、額の汗を拭きながら申しました。「僕ね、もつと早く来るつもりだったんだよ。ところがあんまりさつき高いところへ行きすぎたもんだから、お前達の来たのがわかっていても、すぐ来られなかったんだよ。それは僕は高いところまで行って、そら、あすこに白い雲が環になって光っているんだろう。僕はあのまん中をつきぬけてもつと上に行つたんだ。そして叔父さんに挨拶して来たんだ。僕の叔父さんなんか偉いぜ。今日だつてもう三十里から歩いているんだ。僕にも一緒に行こう

つて云つたけれどもね、僕なんかまだ行かなくてもいいんだよ。」

「うな汝いの叔父さんどごまで行く。」

「僕の叔父さんかい。叔父さんはね、今度ずうつと高いところをまつすぐに北へすすんでいるんだ。」

叔父さんのマントなんか、まるで冷えてしまっているよ。小さな小さな氷のかけらがさらさらぶつかかるんだもの、そのかけらはここから見えやしないよ」

「又三郎さんは去年なも今いまごろ頃ここへ来たか。」

「去年は今よりも少し早かつたろう。面白おもしろかつたねえ。九州からまるで一飛びに馳かけて馳けてまつすぐに東京へ来たろう。もしたら丁度僕は保久大将の家を通りかかつたんだ。僕はね、あの

人を前にも知っているんだよ。だから面白くて家の中をのぞきこんだんだ。障子が二枚はずれてね『すっかり嵐あらしになった』とつぶやきながら障子を立てたんだ。僕はそこから走って庭へでた。あすこにはざくろの木がたくさんあるねえ。若い大工がかなづちを腰こしにはさんで、尤もつともらしい顔をして庭の塀へいや屋根を見廻みまわっていたがね、本当はやっこさん、僕たちの馳はけまわるのが大変面白かったようだよ。唇くちびるがぴくぴくして、いかにもうれしいのを、無理にまじめになつて歩きまわっていたらしかつたんだ。

そして落ちたざくろを一つ拾かじつて噛かつたろう、さあ僕はおかしくて笑つたね、そこで僕は、屋敷やしきの塀へいに沿よつて一寸戻かへつたんだ。それから俄にわかに叫こゑんで大工の頭の上をかけ抜ぬけたねえ。

ドツドド　ドドウド　ドドウド　ドドウ、

甘いざくろも吹き飛ばせ

酸^すっぱいざくろも吹き飛ばせ

ホラね、ざくろの実がばたばた落ちた。大工はあわてたような変なかたちをしてるんだ。僕はもう笑って笑って走った。

電信ばしらの針金を一本切ったぜ、それからその晩、夜どおし馳けてここまで来たんだ。

ここを通ったのは丁度あげがただった。その時僕は、あの高^{たか}洞山^{らやま}のまつ黒な蛇紋岩^{じゃもんがん}に、一つかみの雲を叩^{たた}きつけて行った

んだ。そしてその日の晩方にはもう僕は海の上にいたんだ。海と云ったって見えはしない。もう僕はゆっくり歩いていたらね。

霧きりが一杯にかかつてその中で波がドンブラゴツコ、ドンブラゴツコ、と云つてるような気がするだけさ。今年だつて二百二十日になつたら僕は又馳けて行くんだ。面白いなあ。」

「ほう、いいなあ、又三郎さんだちはいいなあ。」

小さな子供たちは一緒に云いました。

すると又三郎はこんどは少し怒おこりました。

「お前たちはだめだねえ。なぜ人のことをうらやましがるんだい。僕だつてつらいことはいくらもあるんだい。お前たちにもいいこととはたくさんあるんだい。僕は自分のことを一向考えもしないで人のことばかりうらやんだり馬鹿ばかにしているやつらを一番いやなんだぜ。僕たちの方ではね、自分を外ほかのものとかくらべることが一

番はずかしいことになっているんだ。僕たちはみんな一人一人なんだよ。さつきも云ったような僕たちの一年に一ぺんか二へんの大演習の時にね、いくら早くばかり行つたつて、うしろをふりむいたり並ならんで行くものの足なみを見たりするものがあると、もう誰たれも相手にしないんだぜ。やっぱりお前たちはだめだねえ。外の人とくらべることはかり考えているんじゃないか。僕はそこへ行くときさつき空で遭あつた鷹がすきだねえ。あいつは天気の良い日なんか、ずいぶん意地の悪いこともあるけれども空をまっすぐに馳けてゆくから、僕はすきなんだ。銀色の羽をひらりひらりとさせながら、空の青光の中や空の影かげの中を、まっすぐにまっすぐに、まるでどこまで行くかわからない不思議な矢のように馳けて行く

んだ。だからあいつは意地悪で、あまりいい気持はしないけれども、さつきも、よう、あんまり空の青い石を突つつかないでくれつ、て挨拶したんだ。するとあいつが云ったねえ、ふん、青い石に穴があいたら、お前にも向う世界を見物させてやろうつて云うんだ。云うことはずいぶん生意気だけれども僕は悪い気がしなかつたねえ。」

一郎がそこで云いました。

「又三郎さん。おらはお前をうらやましがったんでないよ、お前をほめたんだ。おらはいつでも先生から習っているんだ。本当に男らしいものは、自分の仕事を立派に仕上げることをよろこぶ。決して自分が出来ないからつて人をねたんだり、出来たからつて

出来ない人を見くびつたりささない。お前もそう怒らなくてもいい。
」

又三郎もよろこんで笑いました。それから一寸立ち上つてきりきりとかかどで一ペンまわりました。そこでマントがギラギラ光り、ガラスの沓がカチツ、カチツとぶつつかつて鳴つたようでした。又三郎はそれから又座^{すわ}つて云いました。

「そうだろう。だから僕は君たちもすきなんだよ。君たちばかりでない。子供はみんなすきなんだ。僕がいつでもあらんかぎり叫んで馳ける時、よろこんできやつきやつ云うのは子供ばかりだよ。おととい一昨日だつてそうさ。ひるすぎから俄かに僕たちがやり出したんだ。そして僕はある峠^{とうげ}を通つたね。栗^{くり}の木の青い^くがを落したり、

青葉までがりがりむしつてやったね。その時峠の頂上を、雨の支^し度^{たく}もしないで二人の兄弟が通るんだ、兄さんの方は丁度おまえくらいだったらうかね。」

又三郎は一郎を尖^{とが}った指で指しながら又言葉を続けました。

「弟の方はまるで小さいんだ。その顔の赤い子よりもっと小さいんだ。その小さな子がね、まるでまっ青になつてぶるぶるふるえているだろう。それは僕たちはいつでも人間の眼^めから火花を出せるんだ。僕の前に行つたやつがいたずらして、その兄弟の眼を横の方からひどく^お圧しつけて、とうとうパチパチ火花が^た発つたように思わせたんだ。そう見えるだけさ、本当は火花なんかないさ。それでもその小さな子は空が^{むらさきいろ}紫^{むらさきいろ}色^{むらさきいろ}がかつた^{しろびかり}白^{しろびかり}光^{しろびかり}をしてパ

リパリパリパリと燃えて行くように思ったんだ。そしてもう天地がいまひっくりかえって焼けて、自分も兄さんもお母さんもみんなちりぢりに死んでしまふと思つたんだい。かあいそうに。そして兄さんにまるで石のように堅かたくなつて抱だきついていたね。ところがその大きな方の子はどうだい。小さな子を風のかげになるようにいたわつてやりながら、自分はさも氣持がいいというように、僕の方を向いて高く叫んだんだ。そこで僕も少ししやくにさわつたから、一つ大あばれにあばれたんだ。豆つぶぐらいある石ころをばらばら吹きあげて、たたきつけてやつたんだ。小さな子ももう本当に大声で泣いたねえ。それでも大きな子はやっぱり笑うのをやめなかつたよ。けれどとうとうあんまり弟が泣くもんだから、

自分も怖こわくなつたと見えて口がピクツと横の方へまがつた、そこで僕は急に氣の毒になつて、丁度その時行く道がふさがつたのを幸さいわいに、ぴたつとまるでしずかな湖のように静まつてやつた。それから兄弟と一緒に峠を下りながら横の方の草原から百合ゆりの匂においを二人の方へもつて行つてやつたりした。

どうしたんだろう、急に向うが空あいちまつた。僕は向うへ行くんだ。さよなら。あしたも又来てごらん。又遭えるかも知れないから。」

風の又三郎のすきとおるマントはひるがえり、たちまちその姿は見えなくなりました。みんなはいろいろ今のことを話し合ひながら丘を下り、わかれてめいめいの家に帰りました。

九月四日

「サイクルホールの話聞かせてやろうか。」

又三郎はみんなが丘の栗の木の下に着くやいなや、斯こう云つていきなり形をあらわしました。けれどもみんなは、サイクルホールなんて何だか知りませんでしたから、だまつていましたら、又三郎はもどかしそうに又言いました。

「サイクルホールの話、お前たちは聴ききたくないかい。聴きたくないなら早くはつきりそう云つたらいいじゃないか。僕行つちまうから。」

「聴きたい。」一郎はあわてて云いました。又三郎は少し機嫌きげんを悪くしながらぼつりぼつり話しはじめました。

「サイクルホールは面白い。人間だつてやるだろう。見たことはないかい。秋のお祭なんかにはよくそんな看板を見るんだがなあ、自転車ですりばちの形になつた格子こうしの中を馳けるんだよ。だんだん上にのぼつて行つて、とうとうそのすりばちのふちまで行つた時、片手でハンドルを持ってハンケチなどを振ふるんだ。なかなかあれでひどいんだらう。ところが僕等がやるサイクルホールは、あんな小さなもんじやない。尤もつとも小さい時もあるにはあるよ。お前たちのかまいたちつていうのは、サイクルホールの小さいのだよ。」

「ほ、おら、かまいたちに足切られたぞ。」

嘉助が叫びました。

「何だつて足を切られた？ 本当かい。どれ足を出してごらん。」

又三郎はずいぶんいやな顔をしながら斯う言いました。嘉助はまっ赤になりながら足を出しました。又三郎はしばらくそれを見てから、

「ふうん。」

と医者のような物の言い方をしてそれから、

「一寸脈ちよつとをお見せ。」

と言うのでした。嘉助は右手を出しましたが、その時の又三郎のまじめくさった顔といったら、とうとう一郎は噴ふき出しました。

けれども又三郎は知らん振りをして、だまつて嘉助の脈を見てそれから云いました。

「なるほどね、お前ならことによつたら足を切られるかも知れない。この子はね、大へんからだの皮が薄いんだよ。それに無暗に心臓が強いんだ。腕を少し吸つても血が出るくらいなんだ。殊にその時足をすりむきでもしていたんだろう。かまいたちで切れるさ。」

「何して切れる。」一郎はたずねました。

「それはね、すりむいたところから、もう血がでるばかりにでもなっているだろう。それを空気が押し合せてあるんだ。ところがかまいたちのまん中では、わり合空気が押さないだろう。いき

なりそんな足をかまいたちのまん中に入れると、すぐ血が出るさ

。」

「切るのだないのか。」一郎がたずねました。

「切るのじゃないさ、血が出るだけさ。痛くなかったろう。」又三郎は嘉助に聴きました。

「痛くなかった。」嘉助はまだ顔を赤くしながら笑いしました。

「ふん、そうだろう。痛いはずはないんだ。切れたんじゃないからね。そんな小さなサイクルホールなら僕たちたった一人でも出来る。くるくるまわって走れあいからね。そうすれば木の葉や何かマントにからまって、丁度うまいぐあい工合かまいたちになるんだ。ところが大きなサイクルホールはとて一人じゃ出来あしない。」

小さいのなら十人ぐらい。大きなやつなら大人もはいつて千人だつてあるんだよ。やる時は大^{たいてい}抵^いふたいろあるよ。日がかんかんどこか一とこに照る時か、また僕たちが上と下と反対にかける時ぶつつかつてしまうことがあるんだ。そんな時とまあふたいろにきまつているねえ。あんまり大きなやつは、僕よく知らないんだ。南の方の海から起つて、だんだんこつちにやつてくる時、一寸僕等がはいるだけなんだ。ふうと馳^かけて行つて十ペンばかりまわつたと思うと、もうずっと上の方へのぼつて行つて、みんなゆつくり歩きながら笑っているんだ。そんな大きなやつへうまくはいると、九州からこつちの方まで一ペンに来ることも出来るんだ。けれどもまあ、大抵は途^{とちゆう}中で高いところへ行つちまうね。だから大

きなのはあんまり面白かあないんだ。十人ぐらいでやる時は一番愉快だよ。甲州ではじめた時なんかね。はじめ僕が八ヶ岳やつたけふもとの麓の野原でやすんでたろう。曇くもった日でねえ、すると向うの低い野原だけ不思議に一日、日が照ってね、ちらちらかげろうが上つていったんだ。それでも僕はまあやすんでいた。そして夕方になつたんだ。するとあちこちから

『おいサイクルホールをやろうじゃないか。どうもやらなけあ、いけない様だよ。』ってみんなの云うのが聞えたんだ。

『やろう』僕はたち上つて叫さけんだねえ、

『やろう』『やろう』声があつちこつちから聞えたね。

『いいかい、じゃ行くよ。』僕はその平地をめがけてピーツと飛

んで行つた。するといつでもそんなんだが、まっすぐに平地に行かさないんだ。急げば急ぐほど右へまがるよ、尤もそれでサイクルホールになるんだよ。さあ、みんながつづいたらしいんだ。僕はもうまるで、汽車よりも早くなつていた。下に富士川の白い帯を見てかけて行つた。けれども間もなく、僕はずっと高いところののぼつて、しずかに歩いていたねえ。サイクルホールはだんだん向うへ移つて行つて、だんだんみんなもはいつて行つて、ずいぶん大きな音をたてながら、東京の方へ行つたんだ。きつと東京でもいろいろ面白いことをやったねえ。それから海へ行つたらう。海へ行つてこんどは竜たつまき巻まきをやつたにちがいないんだ。竜巻はねえ、ずいぶんすこ凄こいよ。海には僕はいったことはないんだけ

れど、小さいのを沼でやったことがあるよ。丁度お前達の方のご
維新いしん前ね、日詰ひづめの近くに源五沼という沼があつたんだ。そのすぐ
隣となりの草はらで、僕等は五人でサイクルホールをやつた。ぐるぐ
るひどくまわっていたら、まるで木も折れるくらい烈はげしくなつて
しまつた。丁度雨も降るばかりのところだつた。一人の僕の友だ
ちがね、沼を通る時、とうとう機はずみで水を掬すくつちやつたんだ。さ
あ僕等は今もう黒雲の中に突き入つてまわつて馳けたねえ、水が丁
度漏斗じょうごの尻しりのようになって来るんだ。下から見たら本当にこわ
かつたろう。

『ああ竜りゅうだ、竜だ。』みんなは叫んだよ。実際下から見たら、さ
つきの水はぎらぎら白く光つて黒雲の中にはいつて、竜のしつぱ

のように見えたかも知れない。その時友だちがまわるのをやめたもんだから、水はざあつと一ぺんに日詰の町に落ちかかったんだ。その時は僕はもうまわるのをやめて、少し下に降りて見ていたがね、さっきの水の中にいた鮎ふなやなますが、ばらばらと往来や屋根に降っていたんだ。みんなは外へ出て恭うやうやしく僕等の方を拝んだり、降つて来た魚を押し戴いたいていたよ。僕等は竜じゃないんだけれども拜ままれるとやっぱりうれしいからね、友だち同志にこにこしながらゆつくりゆつくり北の方へ走つて行ったんだ。まったくサイクルホールは面白いよ。

それから逆サイクルホールというのもあるよ。これは高いところから、さっきの逆にまわつて下りてくることなんだ。この時な

らば、そんなに急なことはない。冬は僕等は、大抵シベリヤに行つてそれをやったり、そつちからこつちに走つて来たりするんだ。

僕たちがこれをやつてる間はよく晴れるんだ。冬ならば咽喉のどを痛

くするものがたくさん出来る。けれどもそれは僕等の知つたことじゃない。それから五月か六月には、南の方では、大抵支那しなの揚よ

うすこう

子江うすこうの野原で大きなサイクルホールがあるんだよ。その時丁度

北のタスカロラ海かいしやう床の上では、別に大きな逆サイクルホール

がある。両方だんだんぶつつかるとそこが梅雨つゆになるんだ。日本

が丁度それにあたるんだからね、仕方がないや。けれどもお前達

のところは割合北から西へ外れてるから、梅雨らしいことはあんまりないだろう。あんまりサイクルホールの話をしたから何だか

頭がぐるぐるしちやつた。もうさよなら。僕はどこへも行かない
んだけれど少し睡ねむりたいんだ。さよなら。」

又三郎のマントがぎらつと光つたと思うと、もうその姿は消え
て、みんなは、はじめてほうと息をつきました。それからいろい
ろいまのことを話しながら、丘を下つて銘めい銘めいわかれておうちへ
帰つて行つたのです。

九月五日

「僕は上シャンハイ海ハイだつて何べんも知つてるよ。」みんなが丘へのぼ
つたとき又三郎がいきなりマントをぎらつとさせてそこの草へ

橙だいたいや青だいたいの光を落しながら出て来てそれから指をひろげてみんなの前に突つき出して云いました。

「上海と東京は僕たちの仲間なら誰たれでもみんな通りたがるんだ。どうしてか知ってるかい。」

又三郎はまっ黒な眼を少し意地わるそうにくりくりさせながらみんなを見まわしました。けれども上海と東京ということは一郎も誰も何のことかわかりませんでしたからお互たがいしばらく顔を見合せてだまっていましたら又三郎がもう大得意でにやにや笑いながら言ったのです。

「僕たちの仲間はみんな上海と東京を通りたがるよ。どうしてつて東京には日本の中央気象台があるし上海には支那の中華ちゅうか大気

象台があるだろう。どっちだって偉い人がたくさん居るんだ。本当は气象台の上をかけるときは僕たちはみんな急ぎたがるんだ。どうしてって風力計がくるくるくるくる廻まわっていて僕たちのレコードはちゃんと下の機械に出て新聞にも載のるんだろう。誰だっていいレコードを作りたいからそれはどうしても急ぐんだよ。けれども僕たちの方のきめでは气象台や測候所の近くへ来たからって俄にわかに急いだりすることは大へん卑ひきょう怯おそなことににされてあるんだ。お前たちだってきつとそうだろう、試験の時ばかりむやみに勉強したりするのはいけないことになってるだろう。だから僕たちも急ぎたくたってわざと急がないんだ。そのかわりほんとうに一生けん命かけてる最中に气象台へ通りかかるときはうれしいねえ、

風力計をまるでのぼせるくらいにまわしてピーツとかけぬけるだろう、胸もすつとなるんだ。面白おもしろかつたねえ、一昨年だったけれど六月ころ僕丁度上海に居たんだ。昼の間には海から陸へ移つて行き夜には陸から海へ行つてたねえ、大抵朝は十時頃ごころ海から陸の方へかけぬけるようになっていたんだがそのときはいつでも、うまいぐあい工合ぐあいに气象台を通るようになるんだ。すると气象台の風力計や風信器や置いてある屋根の上のやぐらにいつでも一人の支那人の理学博士と子供の助手とが立っているんだ。

博士はだまっていたが子供の助手はいつでも何か言っているんだ。そいつは頭をくりくりの芥子坊主けしぼうずにしてね、着物だつて袖そでの広い支那服だろう、沓くつもはいてるねえ、大へんかあいらしいんだ

よ、一番はじめの日僕がそこを通ったら斯う言っていた。

『これはきつと颯風くふうですね。ずぶんひどい風ですね。』

すると支那人の博士が葉巻をくわえたままふんふん笑って

『家が飛ばないじゃないか。』

と云うと子供の助手はまるで口を尖とがらせて、

『だって向うの三角旗や何かぱたぱた云ってます。』というんだ。

博士は笑って相手にしないで壇だんを下りて行くねえ、子供の助手は少し悄気しよげながら手を拱こまねいてあとから恭々しくついて行く。

僕はそのとき二・五米メートルというレコードを風力計にのこして笑って行ってしまったんだ。

次の日も九時頃僕は海の霧きりの中で眼がさめてそれから霧がだん

だん融^とけて空が青くなりお日さまが黄金^{きん}のぼらのようにかがやき出したころそろそろ陸の方へ向つたんだ。これは仕方ないんだよ、お日さんさえ出たらきつともう僕たちは陸の方へ行かなければならないようになるんだ、僕はだんだん岸へよつて鷗^{かもめ}が白い蓮華^{れんげ}の花のように波に浮^{うか}んでいるのも見たし、また沢山のジャンクの黄いろの帆^ほや白く塗^ぬられた蒸気船の舷^{げん}を通つたりなんかして昨日の氣象台に通るかかると僕はもう遠くからあの風力計のくるくるくるくる廻るのを見て胸が踊^{おど}るんだ。すつとかけぬけただろう。レコードが一秒五米と出たねえ、そのとき下を見ると昨日の博士と子供の手とが今日も出て居て子供の助手がやつぱり云っているんだ。

『この風はたしかに颯風さつかうですね。』

支那人の博士はやつぱりわらつて気がないように、

『かわら瓦も石も舞まい上らんじやないか。』と答えながらも壇を下りかかるんだ。子供の助手はまるで一生けん命になつて

『だつて木の枝えだが動いてますよ。』と云うんだ。それでも博士はまるで相手にしないねえ、僕もその時はもう气象台をずうつとはなれてしまつてあとどうなつたか知らない。

そしてその日はずうつと西の方の瀬戸物の塔とうのあるあたりまで行つてぶらぶらし、その晩十七夜のお月さまの出るころ海もとへ戻つて睡つたんだ。

ところがその次の日もなんだ。その次の日僕がまた海からやつ

て来てほくほくしながらもう大分の早足で气象台を通りかかったらやっぱり博士と助手が二人出ていた。

『こいつはもう本とうの暴風ですね、』また又あの子供の助手がもつとも尤らしい顔つきで腕を拱うでいてそう云っているだろう。博士はやっぱり鼻であしらうといった風で

『だって木が根こぎにならんじやないか。』と云うんだ。子供はまるで顔をまっ赤にして

『それでもどの木もみんなぐらぐらしてますよ。』と云うんだ。その時僕はもうあとを見なかった。なぜってその日のレコードは八米だからね、そんなに气象台の所にばかり永くとまっているわけには行かなかつたんだ。そしてその次の日だよ、やっぱり僕は

海へ帰っていたんだ。そして丁度八時ころから雲も一ぱいにやって来て波も高かった。僕はこの時はもう両手をひろげ叫び声をあげて气象台を通った。やっぱり二人とも出ていたねえ、子供は高い処ところなもんだからもうぶるぶる顫ふるえて手すりにとりついているんだ。雨も幾いくつぶか落ちたよ。そんなにこわそうにしながらまた斯う云っているんだ。

『これは本当の暴風ですね、林ががあがあ云ってますよ、枝も折れてますよ。』

ところが博士は落ちついてからだを少しまげながら海の方へ手をかざして云ったねえ

『うん、けれどもまだ暴風というわけじゃないな。もう降りよう

。『僕はその語をことばきれぎれに聴ききながらそこをはなれたんだそれからもうかけてかけて林を通るときは木をみんな狂きようじん人のようにゆすぶらせ丘を通るときは草も花もめっちゃやめちやにたたきつけたんだ、そしてその夕方までに上シャンハイ海ハイから八十里も南西の方の山の中に行ったんだ。そして少し疲つかれたのでみんなとわかれてやすんでいたらその晩また僕たちは上海から北の方の海へ抜ぬけて今度はもうまっすぐにこつちの方までやって来るということになったんだ。そいつは低気圧だよ、あいつに従ついて行くことになったんだ。さあ僕はその晩中あしたもう一ぺん上海の气象台を通りたいといくら考えたか知れやしない。ところがうまいこと通ったんだ。そして僕は遠くから風力計の腕わんがまるで眼にも見えない位

速くまわっているのを見、又あの支那人の博士が黄いろなレーン
コートを着子供の助手が黒い合羽かっぱを着てやぐらの上に立って一生
けん命空を見あげているのを見た。さあ僕はもう笛ふえのように鳴り
いならずまのように飛んで

『今日は暴風ですよ、そら、暴風ですよ。今日は。さよなら。』
と叫びながら通つたんだ。もう子供の助手が何を云つたかただそ
の小さな口がびくつとまがったのを見ただけ少しも僕にはわから
なかつた。

そうだ、そのときは僕は海をぐんぐんわたつてこつちへ来たけ
れども来る途とちゆう中でだんだんかけるのをやめてそれから丁度五日
目にここも通つたよ。その前の日はあの水沢の臨時緯いど度観測所も

通った。あすこは僕たちの日本では東京の次に通りたがる所なんだよ。なぜつてあすこを通るとレコードでも何でもみな外国の方まで知れるようになることがあるからなんだ。あすこを通った日は丁度お天気だったけれど、そうそう、その時は丁度日本では入に梅ゆうばい だったんだ、僕は観測所へ来てしばらくある建物の屋根の上にあすんでいたねえ、あすんで居たつて本当は少しとろとろ睡つたんだ。すると俄かに下で

『大丈夫です、すっかり乾かわきましたから。』と云う声がするんだろう。見ると木村博士と氣象の方の技手ぎてとがラケットをさげて出て来ていたんだ。木村博士は瘠やせて眼のキヨロキヨロした人だけれども僕はまあ好きだねえ、それに非常にテニスがうまいんだよ。

僕はしばらく見てたねえ、どうしてもその技手の人はかなわない、まるつきり汗あせだらけになってよろよろしているんだ。あんまり僕も気の毒になつたから屋根の上からじつとボールの往来をにらめてすきを見て置いてねえ、丁度博士がサーヴをつかつたときふうつと飛び出して行つて球を横の方へ外そらしてしまつたんだ。博士はすぐもう一つの球を打ちこんだねえ。そいつは僕は途中に居て途方もなく遠くへけとばしてやった。

『こんな筈はずはないぞ。』と博士は云つたねえ、僕はもう博士にこれ位云わせれば沢山だと思つて観測所をはなれて次の日丁度ここへ来たんだよ。ところでね、僕は少し向うへ行かなくちやいけなから今日はこれでお別れしよう。さよなら。』

又三郎はすつと見えなくなつてしまいました。

みんなは今日は又三郎ばかりあんまり勝手なことを云つてあんまり勝手に行つてしまつたりするもんですから少し変な気もしましたが一所に丘を降りて帰りました。

九月六日

一昨日おとといからだんだん曇つて来たそらはとうとうその朝は低い雨雲を下してまるで冬にでも降るようなまつすぐなしずかな雨がやつと穂ほを出した草や青い木の葉にそそぎました。

みんなは傘かさをさしたり小さなみの蓑からすきとおるつめたいしずく雪をば

たぽた落したりして学校に来ました。

雨はたびたび霽はれて雲も白く光りましたけれども今日は誰たれもあんまり教室の窓からあの丘くの栗くりの木の処を見ませんでした。又三郎などもはじめこそはほんとうにめずらしく奇き体たいだったので、だんだんなれて見ると割合ありふれたことになってしまつてまるで東京からふいに田舎いなかの学校へ移つて来た友だちぐらいにしか思われなくなつて来たのです。

おひるすぎ授業が済んでからはもう雨はすっかり晴れて小さな蝉せみなどもカンカン鳴きはじめたりしましたけれども誰も今日はあの栗の木の処へ行こうとも云わず一郎も耕一も学校の門の処で

「あばえ。」と言つたきり別れてしまいました。

耕一の家は学校から川かわぞ添いに十五町ばかり溯のぼつた処にありました。耕一の方から来ている子供では一年生の生徒が二人ありましたけれどもそれはもう午前中に帰ってしまっていましたし耕一はかばんと傘を持ってひとりみちを川上の方へ帰って行きました。みちは岩の崖がけになつた処の中ごろを通るのでずいぶん度々山たびたびの窪くぼみや谷に添つてまわらなければなりませんでした。ところどころには湧わきみず水もあり、又みちの砂だつてまっ白で平らでしたから耕一は今日も足駄あしだをぬいで傘と一いっしょ緒にもつて歩いて行きました。まがり角を二つまわつてもう学校も見えなくなり前にもうしろにも人は一人も居ず谷の水だけ崖の下で少し濁にごつてごうごう鳴るだけ大へんさびしくなりましたので耕一は口くちぶえ笛ふを吹きながら少

し早足に歩きました。

ところが路みちの一とこに崖からからだをつき出すようにした櫓ならや樺かばの木が路に被かぶさったところがありました。耕一が何気なくその下を通りましたら俄にわかに木がぐらつとゆれてつめたい雫が一ぺんにざつと落ちて来ました。耕一は肩かたからせなかから水へ入ったようになりました。それほどひどく落ちて来たのです。

耕一はその梢こずえをちよつと見あげて少し顔を赤くして笑いながら行き過ぎました。

ところが次の木のトンネルを通るとき又ざつとその雫が落ちて来たのです。今度はもうすっかりからだまで水がしみる位にぬれました。耕一はぎよつとしましたけれどもやっぱり口笛を吹いて

歩いて行きました。

ところが間もなく又木のかぶさった処を通るようになりました。それは大へんに今までとはちがって長かったのです。耕一は通る前に一ぺんその青い枝を見あげました。雫は一ぱいにたまつて全く今にも落ちそうには見えませんでしたしおまけに二度あることは三度あるとも云うのでしたから少し立ちどまつて考えて見ましたけれどもまさか三度が三度とも丁度下を通るときそれが落ちて来るということはないと思つて少しびくびくしながらその下を急いで通つて行きました。そしたらやっぱり、今度もぎあつと雫が落ちて来たのです。耕一はもう少し口がまがつて泣くようになって上を見あげました。けれども何とも仕方ありませんでしたから冷たさ

に一ぺんぶるつとしながらも少し行きました。すると、又ざあと来たのです。

「誰だ。誰だ。」耕一はもうきつと誰かのいたずらだと思つてしばらく上をにらんでいました。がしんとして何の返事もなくなつただ下の方で川がごうごう鳴るばかりでした。そこで耕一は今度は傘をさして行こうと思つて足駄を下におろして傘を開きました。そして俄にわかにどつと風がやつて来て傘はぱつと開きあぶなく吹き飛ばされそうになりました。耕一はよろよろしながらしつかり柄えをつかまえていましたらとうとう傘はがりがり風にこわされて開いた藪きのこのような形になりました。

耕一はどうとう泣き出してしまいました。

すると丁度それと一緒に向うではあはあ笑う声でしたのです。

びつくりしてそちらを見ましたらそいつは、そいつは風の又三郎でした。ガラスのマントも雫でいっぱい髪かみの毛もぬれて束たばになり赤い顔からは湯気さえ立てながらはあはあはあはあふいごのように笑っていました。

耕一はあたりがきいんと鳴るように思ったくらい怒おこってしまいました。

「何なに為すあ、ひとの傘ぶつかして。」

又三郎はいよいよひどく笑ってまるでそこら中ころげるようにしました。

耕一はもうこらえ切れなくなつて持つていた傘をいきなり又三

郎に投げつけてそれから泣きながら組み付いて行きました。

すると又三郎はすばやくガラスマントをひろげて飛びあがつてしまいました。もうどこへ行つたか見えないのです。

耕一はまだ泣いてそらを見上げました。そしてしばらく口惜くやしさにしくしく泣いていましたがやつとあきらめてその壊こわれた傘も持たずうちへ帰つてしまいました。そして縁側えんがわから入ろうとしてふと見ましたらさつきの傘がひろげて干してあるのです。照井耕一という名もちゃんと書いてありましたし、さつきはなれた処もすつかりくつつききれた糸も外ほかの糸でつないでありました。耕一は縁側に座りながらとうとう笑い出してしまったのです。

九月七日

次の日は雨もすつかり霽れました。日曜日でしたから誰たれも学校に出ませんでした。ただ耕一は昨日又三郎にあんなひどい悪戯いたずらをされましたのでどうしても今日は遭あつてうんとひどくいじめてやらなければと思つて自分一人でもこわかつたもんですから一郎をさそつて朝の八時頃べいごろからあの草山の栗の木の下に行つて待つていました。

すると又三郎の方でもどう云うつもりか大へんに早く丁度九時ころ、丘の横の方から何か非常に考え込んだような風をして鼠ねずみいろのマントをうしろへはねて腕組みをして二人の方へやって来た

のでした。さあ、すっかり談判しなくちやいけないと考えて耕一はどきつとしました。又三郎はたしかに二人の居たのも知っていたようでしたが、わざといかにも考え込んでいるという風で二人の前を知らないふりして通つて行こうとしました。

「又三郎、うわあい。」耕一はいきなりどなりました。又三郎はぎよつとしたようにふり向いて、

「おや、お早う。もう来ていたのかい。どうして今日はこんなに早いんだい。」とたずねました。

「日曜でさ。」一郎が云いました。

「ああ、今日は日曜だったんだね、僕ぼくすっかり忘れていた。そうだ八月三十一日が日曜だったからね、七日目で今日が又日曜なん

だね。」

「うん。」一郎はこたえました。が耕一はぷりぷり怒っていました。又三郎が昨日のことなど一言も云わずあんまりそらそらしいものですからそれに耕一に何も云われないように又日曜のことなどばかり云うもんですからじっさいしやくにさわったのです。そこでとうとういきなり叫さけびました。

「うわあい、又三郎、汝うななどあ、世界に無くてもいいな。うわあい。」

すると又三郎はさうに笑いました。

「やあ、耕一君、お早う。昨日はずいぶん失敬したね。」

耕一は何かもつと別のことを言おうと思いましたがあんまり怒

つてしまつて考え出すことができなかつたので又同じように叫びました。

「うわあい、うわあいだが、又三郎、うななどあ世界中に無くてもいいな、うわあい。」

「昨日は實際失敬したよ。僕雨が降つてあんまり気持ちが悪かつたもんだからね。」

又三郎は少し眼めをパチパチさせて気の毒そうに云いましたけれども耕一の怒りは仲々解けませんでした。そして三度同じことを繰り返したのです。

「うわあい、うななどあ、無くてもいいな。うわあい。」

すると又三郎は少し面おもしろ白しろくなつたようでした。いつもの通り

ずるそうに笑つて斯う訊ねました。

「僕たちが世界中になくてもいいってどう云うんだい。箇条を立てて云つてごらん。そら。」

耕一は試験のようだしつまらないことになつたと思つて大へん口惜しかつたのですが仕方なくしばらく考えてから答えました。

「汝などあ悪戯ばりさな。傘ぶつ壊したり。」

「それから？ それから？」又三郎は面白そうに一足進んで云いました。

「それから、樹折つたり転覆したりさな。」

「それから？ それから、どうだい。」

「それから、稲も倒さな。」

「それから？ あとはどうだい。」

「家もぶつ壊かさな。」

「それから？ それから？ あとはどうだい。」

「砂も飛ばさな。」

「それから？ あとは？ それから？ あとはどうだい。」

「シャツポも飛ばさな。」

「それから？ それから？ あとは？ あとはどうだい。」

「それから、うう、電信ばしらも倒さな。」

「それから？ それから？ それから？」

「それなら、塔とうも倒さな。」

「アアハハハ、塔は家のうちだい、どうだいまだあるかい。それ

から？ それから？」

「それがら、うう、それがら、」耕一はつまつてしまいました。
大抵たいていもう云つてしまったのですからいくら考えてももう出ませ
んでした。

又三郎はいよいよ面白そうに指を一本立てながら

「それから？ それから？ ええ？ それから。」と云うのでし
た。耕一は顔を赤くしてしばらく考えてからやつと答えました。

「それがら、かざぐるま風車もぶつ壊かさな。」

すると又三郎は今度こそはまるで飛びあがつて笑つてしまいま
した。笑つて笑つて笑いました。マントも一緒にひらひら波を立
てました。

「そうらごらん、とうとう風車などを云つちやった。風車なら僕を悪く思つちやいないんだよ。勿論もちろん時々壊すこともあるけれども廻まわしてやるときの方がずうつと多いんだ。風車ならちつとも僕を悪く思つちやいないんだ。うそと思つたら聴きいてごらん。お前たちはまるで勝手だねえ、僕たちがちつとばつかしいたずらすることは大業おおぎょうに悪口を云つていいところはちつとも見ないんだ。それに第一お前のさつきからの数えようがあんまりおかしいや。うう、ううてばかりいたんだろう。おしまいはどうとう風車なんか数えちやった。ああおかしい。」

又三郎は又泪なみだの出るほど笑いました。

耕一もさつきからあんまり困つたために怒つていたのもだんだ

ん忘れて来ました。そしてつい又三郎と一所にわらいだしてしまつたのです。さあ又三郎のよろこんだこと俄かにしゃべりはじめました。

「ね、そら、僕たちのやるいたずらで一番ひどいことは日本ならば稲を倒すことだよ、二百十日から二百二十日ころまで、昔はそ^{むかし}の頃ほんとうに僕たちはこわがられたよ。なぜってその頃は丁度稲に花のかかるときだろう。その時僕たちにかげられたら花がみんな散ってしまつてまるで実にならないだろう、だから前は本当にこわがつたんだ、僕たちだつてわざとするんじゃない、どうしてもその頃かけなくちやいかないからかけるんだ、もう三四日たてばきつと又そうなるよ。けれどもいまはもう農業が進んでお前

たちの家の近くなどでは二百十日のころになど花の咲いている稲なんか一本もないだろう、大抵もう柔らかな実になつてゐるんだ。早い稲はもうよほど硬くさえなつてゐるよ、僕らがかけあるいて少し位倒れたつてそんなにひどくとりいれが減りはしないんだ。だから結局何でもないさ。それから一つは木を倒すことだよ。家を倒すなんてそんなことはほんの少しだからね、木を倒すことだよ、これだつて悪戯いたずらじゃないんだよ。倒れないようにして置けあいんだ。葉の潤い樹ひろなら丈夫じょうぶだよ。僕たちが少しぐらいひどくぶつつかつても仲々倒れやしない。それに林の樹が倒れるなんかそれは林の持主が悪いんだよ。林を伐るときはね、よく一年中の強い風向を考えてその風下の方からだんだん伐つて行くんだ

よ。林の外側の木は強いけれども中の方の木はせいばかり高くて弱いからよくそんなことも気をつけなければいけないんだ。だからまず僕たちのこと悪く云う前によく自分の方に気をつけりやいいんだよ。海岸ではね、僕たちが波のしぶきを運んで行くときすぐ枯れるやつも枯れないやつもあるよ。苹果りんごや梨なしやまるめろや胡瓜きゅうりはだめだ、すぐ枯れる、稲いねや薄荷はっかやだいこんなどはなかなか強い、牧草なども強いねえ。」

又三郎はちよつと話をやめました。耕一もすっかり機嫌きげんを直して云いました。

「又三郎、おれああんまり怒ごしやで悪がた。許せな。」
 すると又三郎はすっかり悦よろこびました。

「ああありがとう、お前はほんとうにさっぱりしていい子供だねえ、だから僕はおまえはすきだよ、すきだから昨日もいたずらしたんだ、僕だつていたずらはするけれど、いいことはもつと沢^{たくさ}山^{さん}するんだよ、そら数えてごらん、僕は松の花でも楊^{やなぎ}の花でも草^{くさ}棉^{わた}の毛でも運んで行くだろう。稲の花^{かふん}粉^{ふん}だつてやつぱり僕らが運ぶんだよ。それから僕が通ると草木はみんな丈夫になるよ。悪い空気も持つて行つていい空気も運んで来る。東京の浅草のま^{にじ}るで濁^{にご}つた寒天のような空気をうまく太平洋の方へさらつて行つて日本アルプスのいい空気だつて代りに持つて行つてやるんだ。もし僕がいなかったら病気も湿^{しっけ}気もいくらふえるか知れないんだ。ところで今日はお前たちは僕にあうためにばかりここへ来たのか

い。けれども僕は今日は十時半から演習へ出なけあいけないからもう別れなけあならないんだ。あした又^{また}来ておくれ。ね。じゃ、さよなら。」

又三郎はもう見えなくなっていました。一郎と耕一も「さよなら」と云いながら丘を下りて学校の誰^{たれ}もいない運動場で鉄棒にとりついたりいろいろ遊んでひるころうちへ帰りました。

九月八日

その次の日は大へんいい天気でした。そらには霜^{しも}の織物のよう
な又白い孔^{くじゃく}雀のはねのような雲がうすくかかってその下を鳶^{とんび}が

黄金きんいろに光つてゆるく環わをかいて飛びました。

みんなは、

「とんびとんび、とつとび。」とかわるがわるそつちへ叫びながら丘をのぼりました。そしていつもの栗くりの木の下へかけ上るかあがらないうちにもう又三郎のガラスの沓くつがキラツと光つて又三郎は一昨日おとといの通りまじめくさつた顔をして草に立っていました。

「今日は退たい屈くつだったよ。朝からどこへも行きやしない。お前たちの学校の上を二三べんあるいたし谷底へ二三べん下りただけだ。ここらはずいぶんいい処ところだけれどもやつぱり僕はもうあきたねえ。」又三郎は草に足を投げ出しながら斯う云いました。

「又三郎さん北極だの南極だのおべだな。」

一郎は又三郎に話させることになれてしまつて斯う云つて話を釣^つり出そうとしました。

すると又三郎は少し馬鹿にしたように笑つて答えました。

「ふん、北極かい。北極は寒いよ。」

ところが耕一は昨日からまだ怒^{おこ}つていましたしそれにいまの返事が大へんしやくにさわりましたので

「北極は寒いかね。」とふざけたように云つたのです。さあすると今度は又三郎がすっかり怒つてしまいました。

「何だい、お前は僕をばかにしようと思つてるのかい。僕はお前たちにばかにされあしないよ。悪口を云うならもう少し上手にやるんだよ。何だい、北極は寒いかねつてのは、北極は寒いかね、ほ

んとうに田舎くさいねえ。」

耕一も怒りました。

「何なした、汝うななどそだら東京だが。一年中うろうろど歩つてばかり居でいだずらばがりさな。」

ところが奇き体たいなことは、斯う云つたとき、又三郎が又俄にわかによろこんで笑い出したのです。

「もちろん僕は東京なんかじゃないさ。一年中旅行さ。旅行の方が東京よりは偉えらいんだよ。旅行たつて僕のはうろうろじゃないや。かけるときはきいつとかけるんだ。赤道から北極まで大だい循じゆん環かんささえやるんだ。東京なんかよりいくらか知れない。」

耕一はまだ怒つてにぎりこぶしをにぎつていましたけれども又

三郎は大機嫌でした。

「北極の話聞かせないが。」一郎が又云いました。すると又三郎はもつとひどくにこにこしました。

「大循環の話なら面白いけれどむずかしいよ。あんまり小さな子はわからないよ。」

「わかる。」一年生の子が顔を赤くして叫びました。

「わかるかね。僕は大循環のことを話すのはほんとうはすきなんだ。僕は二遍へんやったよ。尤も一遍もつとは途とちゆう中からやめて下りたけれど、僕たちは五遍大循環をやつて来ると、もうそれ幅はばが利きくんだからね、だからみんなでかけるんだよ、けれども仲々うまく行かないからねえ、ギルバート群島からのぼつて発たつたと

きはうまくいったけれどねえ、ボルネオから発つたときはすつかりしくじっちゃつたんだ。それでも面白かつたねえ、ギルバート群島の中の何と云う島かしら小さいけれども白壁しろかべの教会もあつた、その島の近くに僕は行つたねえ、行つたつて仲々容易じやないや、あすこらは赤道無風帯つてお前たちが云うんだらう。僕たちはめつたに歩けやしない。それでも無風帯のはじの方から舞まい上つたんじや中々高いところへ行かないし高いところへ行かなきや北極だなんて遠い処とこへも行けないから誰たれでもみんななるべく無風帯のまん中へ行こう行こうとするんだ。僕は一生けん命すきをねらつてはひるのうちに海から向うの島へ行くようにし夜のうちに島から又向うの海へ出るようにして何べんも何べんも戻もどつたりしな

がらやつとすつかり赤道まで行つたんだ。赤道には僕たちが見るとちやんと白い指導標が立っているよ。お前たちが見たんじゃわかりやしない。大循環志願者出発線、これより北極に至る八千九百ベエスター南極に至る八千七百ベエスターと書いてあるんだ。そのスタートに立って僕は待っていたねえ、向うの島の椰子の木は黒いくらい青く、教会の白壁は眼へしみる位白く光っているだろう。だんだんひるになって暑くなる、海は油のようにとろつとなつてそれでもほんの申しわけに白い波がしらを振つている。

ひるすぎの二時頃になつたらう。島で銅鑼がだるそうにぼんぼんと鳴り椰子の木もパンの木も一ぱいからだをひろげてだらしくなくねむっているよう、赤い魚も水の中でもうふらふら泳いだり

じつととまったりして夢ゆめを見ているんだ。その夢の中で魚どもはみんな青ぞらを泳いでいるんだ。青ぞらをぷかぷか泳いでいると思っっているんだ。魚というものは生意気なもんだねえ、ところがほんとうは、その時、空を騰のぼって行くのは僕たちなんだ、魚じゃないんだ。もうきつとその辺にさえ居れや、空へ騰のぼって行かなくちゃいけないような気がするんだ。けれどもものぼって行きたってそれはそれはそおつとのぼって行くんだよ。椰子の樹の葉にもさわらず魚の夢もさまさないようにまるでそおつとのぼって行くんだ。はじめはそれでも割合早いけれどもだんだんのぼって行って海がまるで青い板のように見え、その中の白いなみがしらもまるで玩具おもちゃのように小さくちらちらするようになり、さつき

の島などはまるで一粒つぶの緑柱石りよくちゆうせきのように見えて来るころは、僕たちはもう上の方のずうつと冷たい所に居てふうと大きく息をつく、ガラスのマントがぱつと曇ったり又さつと消えたり何べんも何べんもするんだよ。けれどもとうとうすっかり冷くなつて僕たちはがたがたふるえちまうんだ。そうすると僕たちの仲間のぼんな集つて手をつなぐ。そしてまだまだ騰のぼつて行くねえ、そのうちとうとうもう騰れない処まで来ちまうんだよ。その辺の寒さなら北極とくらべたつてそんなに違ちがやしない。その時僕たちはどうしても北の方に行かなきやいけないようになるんだ。うしろの方では

『ああ今度はいいよ、かけるんだな。南極はここから八千七百

ベエスターだねえ、ずいぶん遠いねえ』なんて云っている、僕たちもふり向いて、ああそうですね、もうお別れです、僕たちはこれから北極へ行くんです、ほんの一寸ちよっとの間でしたね、ご一いっしょ緒しよしたのも、じゃさよならって云うんだよ。もうそう云ってしまいかしまわないうち僕たち北極行きの方はどんどんどんどん走り出しているんだ。咽喉のどもかわき息もつかずまるで矢のようにどんどんどんどんかける。それでも少しも疲れつかあしない、ただ北極へ北極へとみんな一生けん命なんだ。下の方はまっ白な雲になっていることもあれば海か陸かただ蒼黝あおぐろく見えることもある、昼はお日さまの下を夜はお星さまたちの下をどんどんどんかけ行くんだ。ほんとうにもう休みなしでかけるんだ。

ところがだんだん進んで行くうちに僕たちは何だかお互たがいの間が狭せまくなつたような気がして前はひとりで広い場所をとつて手だけつなぎ合つてかけて居たのが今度は何だかとなりの人のマントとぶつつかつたり、手だつて前のようにのばして居られなくなつて縮まるんだろう。それがひどく疲れるんだよ。もう疲れて疲れて手をはなしそうになるんだ。それでもみんな早く北極へ行こうと思うから仲々手をはなさない、それでもとうとうたまらなくなつて一人二人ずつ手をはなすんだ。そして

『もう僕だめだ。おりるよ。さよなら。』

とずうつと下の方で聞えたりする。

二日ばかりの間に半分ぐらいになつてしまった。僕たちは新ら

しい仲間と又手をつないでお互顔を見合せながらどこまでもどこまでも北を指して進むんだ。先せんころ頃僕行つて挨拶あいさつして来たおじさんはもう十六回目の大循環なんだ。飛びようだつてそれあ落ちて着いているからね、僕が下から、おじさん、大丈夫ですかつて云つたらおじさんは大きな大きなまるで僕なんか四人も入るようなマントのぼたんをゆつくりとかけながら、うん、お前は今度はタスカロラのはじに行くことになつてるのだな、おれはタスカロラにはあさつての朝着くだろう。戻りにどこかで又あうよ。あんまり乱暴するんじゃないよつてんだ。僕がええ、あばれませんからと云つたときはおじさんはもうずうつと向うへ行つていてそのマントのひろいせなかが見えていた、僕がそう云つてもただ大きく

うなずいただけなんだ。えらいだろう。ところが僕たちのかけて行つたときはそんなにゆつくりしてはいなかつた。みんな若いものばかりだからどうしても急ぐんだ。

『この下はハワイになつていよ。』なんて誰か叫ぶものもあるねえ、どンドンどん僕たちは急ぐだろう。にわかには霧きりの出ることがあるだろう。お前たちはそれがみんな水玉だと考えるだろう。そうじゃない、みんな小さな小さな氷のかけらなんだよ、顕微鏡けんびきょうで見たらもういくらすきとおつて尖とがっているか知れやしない。

そんな旅を何日も何日もつづけるんだ。

ずいぶん美しいこともあるし淋さびしいこともある。雲なんかほん

とうに奇麗きれいなことがあるよ。」

「赤くてが。」耕一がたずねました。

「いいや、赤くはないよ。雲の赤くなるのは戻りさ。南極か北極へ向いて上の方をどんどん行くときは雲なんか赤かあないんだよ。赤かあないんだけれど、それあ美しいよ。ごく淡あわいいろの虹にじのように見えるときもあるしねえ、いろいろなんだ。

だんだん行くだろう。そのうちに僕たちは大分低く下っていることに気がつくよ。

夜がぼんやりうすあかるくてそして大へんみじかくなる。ふつと気がついて見るともう北極けん圏に入っているんだ。海は蒼あおくろ黝くろく
て見るから冷たそうだ。船も居ない。そのうちにとうとう僕たち

は冰山を見る。朝ならその稜かどが日に光っている。下の方に大きな白い陸地が見えて来る。それはみんながちがちの氷なんだ。向うの方は灰のようなけむりのような白いものがぼんやりかかってよくわからない。それは氷の霧なんだ。ただその霧のところどころから尖ったまっ黒な岩があちこち朝の海の船のように顔を出しているねえ。

『あすこはグリーンランドだよ。』僕たちは話し合うんだ。いままでどこをとんでいたのかももう今度で三度目だなんていう少し大きい方の人などが大威張おおいばりでやって来ているいろいろその辺のことなど云うんだ。

『そら、あすこのところがゲーキー湾だよ。知ってるだろう。英国

のサア、アーキバルド、ゲーキーの名をつけた湾なんだ。ごらん
そら、氷河ね、氷河が海にはいるねえ、あれで少しずつ押おされて
だんだん喰はみ出してゐるんだよ、そしてとうとう氷河から断きれて氷
山にならあね。あつちは？ あつちが英国さ、ここはもう地球の
頂上だからどっちへ行くたつて近いやね、少し間違えば途方もな
い方へ降りちまうよ。あつち？ あつちが英国さ。』なんてほん
とうに威張つてるんだ。僕たちはもう殆ほとんど東の方へ東の方へと
北極を一まわりするようになるんだ。この時だよ、僕らのこわい
のは。大循環でいちばんこわいのはこの時なんだよ、この僕たち
のまわるもつと中の方に極きよくうず渦ずといつて大きな環わがあるんだ。
その環にはいつたらもう仲々出られない。卑ひきよう怯じょうなものはそので

もみんな入っちゃまうよ。環のまん中に名高い、ヘルマン大佐がいるんだ。人間じやないよ。僕たちの方のだよ。ヘルマン大佐はまっすぐに立って腕うでを組んでじろじろあたりをめぐっているものを見ているねえ、そして僕たちの眼の色で卑怯だったものをすぐ見わけるとんだ。そして

『こら、その赤毛、入れ。』と斯こう云うんだ。そう云われたらもうおしまいだ極渦の中へはいつてぐるぐるぐるまわる、仲々出ていいとは云わないんだ。だから僕たちそのときは本当に緊きんち張ようするよ。けれどもなんにも卑怯をしないものは割合平気だねえ、大循環の途中でわざとつかれた隣となりの人の手をはなしたものの早くみんなやめるといいと考えてきろきろみんなの足なみを

見たりしたものはどれもすっかり入れられちまうんだ。

そのうちだんだん僕らはめぐるだろう。そして下の方におりるんだ。おしまいにはまるで海とすれすれになる。そのときあちこちの氷山に、大循環 到着者とうちやくしゃはこの附近ふきんに於おいて数日間休養すべし、帰路は各人の任意なるも障碍しょうがいは来路に倍するを以もつて充分じゅうぶんの覚悟かくごを要す。海洋は摩擦まさつ少きも却かえつて速度は大ならず。最も愚ぐ鈍どんなるもの最も賢かしこきものなり、という白い杭くいが立っている。これより赤道に至る八千六百ベスターというような標もあちこちにある。だから僕たちはその辺でまあ五六日はやすむねえ、そしてまったたくあの辺は面白いんだよ。白熊しろくまは居るしね、テツデーベーヤき。あいつはふざけたやつだねえ、氷のはじめに立ってとぼけた

顔をしてじつと海の水を見ているかと思うと俄かに前肢まえあしで頭をかかえるようにしてね、ざぶんと水の中へ飛び込むんだ。するとからだ中の毛がみんなまるで銀の針のように見えるよ。あつぷあつぷおぼ溺れるまねをしたりなんかもするねえ、そんなことをしてふざけながらちやんと魚をつかまえるんだからえらいや、魚をつかまえてこんどは大威張りで又氷にあがるんだ。魚というものは本当にばかなもんだ、ふざけてさえ居れば大丈夫だいじょうぶこわくないと思ってるんだ。白熊はなかなか賢いよ。それからその次に面白いのは北極光オーロラだよ。ぱちぱち鳴るんだ、ほんとうに鳴るんだよ。紫むらさきだの緑だのずいぶん綺麗な見世物だよ、僕らはその下で手をつなぎ合ってぐるぐるまわったり歌ったりする。

そのうちとうとう又帰るようになるんだ。今度は海の上を渡つて来る。あ、もう演習の時間だ。あした又話すからね。じゃさよなら。」又三郎は一ぺんに見えなくなつてしまいました。みんなも丘をおりたのです。

九月九日

「北極は面白いけれどもそんなに永くとまっている処とこじゃない。うっかりはせまわつてふらふらしているとこなどを、ヘルマン大佐になど見られようもんならさつそく、おいその赤毛、入れ、なんて来るからねえ、いくら面白いたって少し疲れさえなおつたら

出発をはじめるんだよ。帰りはもう自由だからみんなで手をつながなくてもいいんだ。気の合った友達と二人三人ずつ向うの隙すき次第でか出掛けるだろう。僕の通つて来たのはベーリング海かいきよう 峡かから太平洋を渡つて北海道へかかったんだ。どうしてどうして途中のひどいこと前に高いところをぐんぐんかけたどこじやない、南の方から来てぶつつかるやつはあるし、ぶつつかったときは霧ができたり雨をちらしたり負ければあと戻りをしなけあいけないし丁度力が同じだとしばらくとまったりこの前のサイクルホールになつたりするし勝つたつてよつほど手間取るんだからそらあ實際気がいらいらするんだよ。喧嘩けんかだつてずいぶんするよ。けれども決して卑怯はしない。そら僕らが三人ぐらい北の方から少し西へ寄

つて南の方へ進んで行くだろう、向うから丁度反対にやって来るねえ、こつちが三人で向うが十人のこともある、向うが一人のこともある、けれども勝まけは人数じゃない力なんだよ、人数へ速さをかけたものなんだよ、

君たちはどこまで行こうつての、こつちが遠くからきくねえ、

アラスカだよ。向うが答えるだろう。冗談じょうだんじゃないや、アラ

スカなんか行くとこはありやしない。僕たちがそつちから来たんじゃないか。いいや、行くように云われて来たんだ、さあ通してお呉くれ、いいや僕たちこそ大循環だいじゆんかんなんだ、よくマークを見てごらん、大循環と云われると大抵たいていたれ誰たれでも一寸ちよつと顔やわいろを和らげてマークをよく見るねえ、はじめから、ああ大循環だ通してやれ

なんて云うものもそれあるよ。けれども仲々大人なんかにはた
ちの悪いのもあるからね、なんだ、大循環だ、かつぱめ、ばかに
しやがるな。どけ。なんてわざと空っぽな大きな声を出すものも
あるんだ。いいえどかれません、じゃ法令の通りボツクシングを
やりましようとなるだろう、勝つことも負けることもある、けれ
ども僕は卑怯は嫌いだからねえ、もしすきをねらつて遁げたりす
るものがあつてもそんなやつを追いかけやしない、あとでヘルマ
ン大佐につかまるよつてだけ云うんだ。しずかな日きまつた速さ
で海面を南西へかけて行くときはほんとうにうれしいねえ、そん
な日だつて十日に三日はあるよ、そう云うふうにして丁度北極か
ら一ヶ月目に僕は津軽海峡を通つたよ、あけがたでね、函館はこだての

砲台ほうだいのある山には低く雲がかかっている、僕はそれを少し押しながら進んだ、海すずめが何重もの環わになって白い水にすれすれにめぐっている、かもめも居る、船も通る、えとろふ丸なんて云う荷物を一杯に積んだ大きな船もあれば白く塗ぬられた連絡船れんらくもある。そうそう、そのとき僕は北海道の大学の伊藤さんにも会った。あの人も氣象をやってるから僕は知っている。

それから僕は少し南へまっすぐに朝鮮へかかったよ。あの途中のさびしかったことね、僕はたった一人になっていたもんだから、雲は大へんきれいだっだし邪魔じゃまもあんまりなかったけれどもほんとうにさびしかったねえ、朝鮮から僕は又東の方へ西風に送られて行ったんだ。海の中ばかりあるいたよ。商船の甲板でシガアの

紫の煙けむりをあげるチーフメートの耳の処で、もしもしお子さんはもう歩いておいでですよ、なんて云って行くんだ。船の上の人たちへの僕たちの挨拶は大抵こ斯んな工合なんだよ、

上の方を見るとあの冷たい氷の雲がしずかに流れている。そうだあすこを新らしい大循環の志願者たちが走って行く。いつ又僕は
大循環へ入るだろう、ああもう二十日かそこらでこんどのは卒業するんだ、と考えるとほんとうに何とも云えずうれしい気がするねえ。」

「おらの方の試験と同じだな。」耕一が云いました。

「うん、けどおまえたちの試験よりはむずかしいよ。お前たちの試験のようなもんならただ毎日学校へさえ来ていけば遊んでい

ても卒業するだろう。」又三郎はきつと誰か怒るたれおこだろうと思つて少し口をまげて笑いながら斯う云いました。

「おらの方だて毎日学校さ来るのひでじやい。」耕一が大して怒つたでもなしに斯う云いました。

「ふん、そうかい、誰だつて同じことだな。さあ僕は今日もいそがしい。もうさよなら。」

又三郎のかたちはもうみんなの前にありませんでした。みんなはばらばら丘をおりました。

九月十日

「ドツドド、ドドウド、ドドウド、ドドウド、ドドウド、

ああまいざくろも吹き飛ばせ、

すっぱいざくろも吹き飛ばせ、

ドツドド、ドドウド、ドドウド、ドドウド、ドドウド

ドツドド、ドドウド、ドドウド、ドドウド、ドドウド。」

先頃又三郎から聴いたばかりのその歌を一郎は夢の中で又き

いたのです。

びっくりして跳ね起きて見ましたら外ではほんとうにひどく風

が吹いてうしろの林はまるで咆えるよう、あけがた近くの青ぐる

いうすあかりが障子や棚の上の提灯箱や家中いっぱいでした。

一郎はすばやく帯をしてそれから下駄をはいて土間に下り馬屋

の前を通つて潜くぐりをあけましたら風がつめたい雨のつぶと一いっしよ緒にどうつと入つて来ました。馬屋のうしろの方で何かの戸がばたつと倒たおれ馬はぶるるつと鼻を鳴らしました。

一郎は風が胸の底まで滲しみ込んだように思つてはあと強く息を吐はきました。そして外へかけ出しました。

外はもうよほど明るく土はぬれて居おりました。家の前の栗くりの木の列は変に青く白く見えてそれがまるで風と雨とで今洗せんたく濯たくをするとでも云うように烈はげしくもまれていました。青い葉も二三枚飛び吹きちぎられた栗のいがは黒い地面にたくさん落ちて居おりました。

空では雲がけわしい銀いろに光りどんだんだん北の方へ吹

きとばされていました。

遠くの方の林はまるで海が荒れているようにごんごんと鳴ったりざあと聞えたりするのです。一郎は顔や手につめたい雨の粒を投げつけられ風にきものも取って行かれそうになりながらだまってその音を聴きすましじつと空を見あげました。もう又三郎が行ってしまったのだらうかそれとも先頃約束したように誰かの目をさますうち少し待つて居て呉れたのかと考えて一郎は大へんさびしく胸がさらさら波をたてるように思いました。けれども又じつとその鳴って吠えてうなつてかけて行く風をみていますと今度は胸がどかどかなつてくるのです。昨日まで丘や野原の空の底に澄みきつてしんとしていた風どもが今朝夜あけ方俄かの

にいっせい一斉に斯う動き出してどんどんどんタスカロラ海かいしやう床の北のはじをめぐけて行くことを考えますともう一郎は顔がほてり息もはあ、はあ、なつて自分までが一緒に空を翔かけて行くように胸を一杯にはり手をひろげて叫さけびました。

「ドツドドドドウドドドウドドドウド、あまいぎくろも吹きとばせ、すっぱいぎくろも吹きとばせ、ドツドドドドウドドドウドドドウド、ドツドドドドウドドドドウドドドウド。」

その声はまるできれぎれに風にひきさかれて持って行かれましたがそれと一緒にうしろの遠くの風の中から、斯ういう声がきれぎれに聞えたのです。

「ドツドドドドウドドドドウドドドウド、

櫛ならの木の葉も引つちぎれ

とちもくるみもふきおとせ

ドツドツドツドウドウドウドウドウ。」

一郎は声の来た栗の木の方を見ました。俄かに頭の上で

「さよなら、一郎さん、」と云ったかと思うとその声はもう向うのひのきのかきねの方へ行っていました。一郎は高く叫びました。

「又三郎さん。さよなら。」

かきねのずうつと向うで又三郎のガラスマントがぎらつと光りそれからあの赤い頬ほおとみだれた赤毛とがちらつと見えたと思うと、もうすうつと見えなくなつてただ雲がどんどん飛ぶばかり一郎はせなか一杯風を受けながら手をそっちへのぼして立っていたので

す。

「ああ烈^ひで風だ。今度はすっかりやらへる。一郎。ぬれる、入れ
。」いつか一郎のおじいさんが潜りの処でそらを見上げて立つて
いました。一郎は早く仕度をして学校へ行ってみんなに又三郎の
さようならを伝えたいと思つて少しもどかしく思いながらいそい
で家の中へ入りました。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」新潮文庫、新潮社

1995（平成7）年2月1日発行

1997（平成9）年5月25日3刷

入力：土屋隆

校正：高柳典子

2008年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

風野又三郎

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>